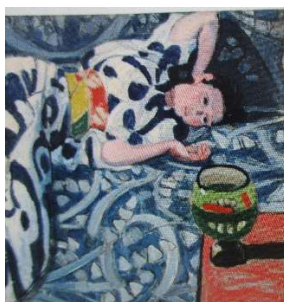


宮本三郎 絵画の変奏曲

世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館（世田谷・奥沢5）23.10.07～24.03.10

洋画家「宮本三郎」（1905～1974）の画業は、めまぐるしいほどの画風の変遷に驚かされる一方で、一つの主題を様々な多様性で描いていたことがよくわかる。



《作品名不詳(夫人像)》 1960年頃 紙、鉛筆、コンテ 左上

《青い背景》 1960年頃 右上

同じモデルに同じようなヘヤスタイルやポーズを取らせながら、全体をまとめる色調を赤、青、緑などに変えて制作を重ねるなど、画面上に変化をもたらす実験的な試行の痕跡がうかがえる作品である。

《金魚鉢と女》 1936年 中左から1

《室内裸婦》 1937年 中左から2

1930年代半ばの頃の浴衣をまとった描いた作品は、背景に配したテキスタイルや金魚鉢など「マティス」の影響を思わせるモチーフが共通する作例がある。

それらは同じ画題を描きつつも、モデルのポーズや構図、カンヴァスの寸法そのものにも違いが見られるなど、画伯の創意工夫と試行錯誤の跡が見てとれる。

《画室の裸婦》 1954年 中左から3

《裸婦》 1954年 中左から4

同じセッティングで裸婦を描きつつ、抽象化の度合いを幾通りか試した1950年代の一連の作品である。作品は、すべて油彩/カンヴァス。